

日本東亞同文書院編

(第二十冊)

中國省別全志

綫裝書局

第十卷

湖
南
省
(二)

大正七年

一九一八年

東亞同文會

第六編

第六編 主要物産及商業慣習

第一章 湖南省に於ける米

第一節 概説

第一 米産區域

湖南省は支那に於て江蘇省に次げる米の大産地にして、米は全省産物の大宗たり、而して殆ど全省其産を見ざるなきも、稻田の多きは洞庭湖沿岸及沅江、澧水湘江の流域とす、就中湘江流域は産額最も多し、尤も洞庭湖の周圍なる稻田の面積は頗る大なるものなれども、夏期に於ける氾濫は殆ど例年の事にして、附近に於ける耕作地防水隄(圍子)破壊して其産額を減少すること少からざるなり、此外高地に於ては多數の用水池を堀り、附近山岳より流下する雨水を貯藏し、灌漑に供し、平地に於て灌漑不便の地は井戸を堀り龍骨車を用ゐ灌漑す、要するに湖南省は山岳を除くの外土地の高低を問はず、悉く稻田なりと稱するも不可なきの

觀あり。

第二 種類品質及用途

湖南産米は粳糯秈の三種にして、粳は楕圓形粒をなし味良好なり、糯は我「モチ」と同じく、秈とは粒の兩端尖り稍細長さものにして、其味良好ならず、低濕の地に生ず、其他精粗に由り上、中、下米の三種とし、收穫期に依り早稻、中稻、晚稻と稱す、尙各地の名稱を附し、易俗河米、靖港米等と呼ぶ。

次に湖南米の品質に就きて見るに、先年我農商務省に於て分拆したる所に據れば左の如し。

	水分	灰分	エーテル 浸出物	粗蛋白質	粗纖維	可溶 室素物
上米	一六・三二九	一・三六三	〇・五九五	八・四三五	〇・五五〇	七二・七二八
中米	一六・一一四	二・八二三	〇・五九四	七・三一	〇・六九六	七二・四六二
下米	一五・七八八	三・〇四五	〇・七六四	七・三二九	〇・七五五	七二・三一九

米の品質は蛋白質多量なる丈上等にして、脂肪、エーテル浸出物及灰分の量増加に連れて順次劣等となる、今本邦米及外國米が支那米に比し如何なる成分を

含有するかを見るに、即ち左の如し。

品 名	蛋白質	脂肪	炭水化物	灰 分
本邦米平均	七・九六四	〇・二八五	九一・三四七	〇・四〇三
外國米平均	七・一六三	〇・四七三	九一・七三七	〇・五三七

此の兩者を比較せば支那米の含有する蛋白量は本邦米及其他に劣り、支那米にても湖南米は江蘇米に及ばず、蓋し湖南地方に於ては水害の恐あるに加へ、二回以上も米穀の收穫を得るに努むる結果、稻米の充分黄熟するを待たずして刈入れ、且之を日光に晒して乾燥せしむるに由り、品質、風味、乾燥の程度、支那米中にも佳良ならず、又地味肥沃ならざると、耕作栽培の法幼稚なることも、確かに其原因ならん。

湖南米中靖港に集まるものは、易俗河米に比し品質、風味等良好なるも、其輸送一に水運なるを以て水分を含有し、又時に船頭に於て重量を増加する爲め故意に水を加ふることあり、易俗河に集來するものは品質、風味、靖港米に劣れりと難も、其の運搬陸路なるが故に、靖港米に比し乾燥せり、今省内に於ける米の産地に

付品質の等級を見るに、寧郷を第一位とし、順次雲田、易家灣、白沙洲、株洲等の五等となすを得べし、而して其用途は主として米飯に供するの外、糊菓子、造酒の原料に使用せらるゝこと我國と異なるものなし。

第三 耕地積栽培法及收穫

耕地積 丈量の制完備せざるを以て、地積の確實なる數を知ることは至難の事に屬す、其の田額に就き光緒年間の統計には、湖南省は三四八、七四二頃五五畝なしが民國となり湖南省農會の調査したるものを見るに次の如し。

		官有田		民有田	
沅江縣	二二五、四〇〇 畝	一三、四五五	鳳凰縣 畝	一、五〇〇 畝	八
寧鄉縣	一一、三〇〇		江華縣		三五〇
衡山縣	三、五〇〇		麻陽縣		二二二
漢壽縣	二一、六〇〇	三、三〇〇	新寧縣	六四	六四
武岡縣	九四		宜章縣	五	五五
茶陵縣	六〇〇		合計	二四八、九六三	三五、六九六

次に早晚開墾すべき豫定地域にして未だ著手せざるもの、官民兩部を合して全省に於ては五十二萬八千四十二畝なりと云ふ。

耕作 耕作は水牛又は黄牛を用ゐ、人力を加ふると少し、一般に我國に比し粗雑なるを免れず、然れども其使用せる農具の如きは割合に發達し、日本に於て近來使用せらるゝものも、支那に於ては已に昔より使用し來れり、灌漑は平地に井戸を堀り黄牛又は水牛の力に由り水を捲き揚げ、或は人力にて龍骨車を使用するものあり。

肥料は日本と大差なきが如し、只化學的肥料の使用せらるゝもの極めて稀にして、獨り石灰の所々に用ゐらるゝものあるに過ぎず、故に豆糟、魚肥の用ゐらるもの少し、日本に於ては馬肥、牛肥の使用多きも當地方は牛又は豚の堆肥多く使用せらる。

栽培は初め苗代に播種し、早稻、中稻、晚稻に由りて本田に植付時期を異にす、早稻に在りては陰曆三月に播種し、四月に至りて水田に分秧し、六月に收穫す、晚稻は六月初めに分秧し、八、九月に到りて刈取るものとす、最も晚きものは十月に至

りて刈取るものありと云ふ、中稻は其中間に在るものにして早稻よりも三週間遅れて播種す、而して苗の植付を見るに、我國に比し株間狭く亦一株の苗數も我國に比すれば多きが如し、之れ收穫の増加を計らんとするなる可けれども、却て稻の發育充分ならざるを以て、收穫の増加を來すことなく、徒に地力を疲らすに過ぎず、而して早稻熟すれば之を刈取り牛を以て耕し中稻を植ゆ、然れども煩雜を厭ひて早稻の熟せんとする時、始めより株と株との間に苗を植へて、早稻は刈取り後は何等の手入をなさざるものあり、吾人も長沙より萍鄉間に於て一田内黄熟せる中に、青苗の植付あるを見たり、而して手入としては早稻を刈取るや、其舊切株を足にて地中に踏み入るゝに過ぎず、此の如くなれば其栽培法は決して良好なるものと云ふを得ず。

除草は之を爲さざるに非ずと雖も、手を以て綿密に爲すこと少なく、熊手の如きものを用ゐる除草をなす、此器を用ゐざるものは只足にて雜草を踏み込むのみ、而も其の回數は二回以上に及ぶこと少しと云ふ。

稻熟すれば刈取り、田の中又は其附近に於て粃を落す、而も刈取後乾燥を待つ

ことなく直ちに竹簾に打付けて粃と稗とを分離す、我稻^{コキ}扱器の如きものを見ず、分離したる粃を一定の粃乾燥場に撒き之を日光に晒らし乾燥す。

害蟲驅除其他 害虫驅除を爲すもの稀なり、爲めに一田殆ど枯れたるもの、又は害虫の爲め青葉を見ざるもの等屢見受く、其他害鳥を防ぐ設備も殆ど無し、日本に於ては大抵案山子、鳴子等の設備ありと雖も、湖南地方には之を見ず。

次に播種の際に於て少しも撰種に意を用ゆることを爲さざるため、一田中に數種の稻成長し、稗の如きも之を除かざるが故に、高く成長したるを見る、支那人は稗の米飯中に入るも意に介せざるものゝ如し。

第四 生産額及一畝の産額一石の質量

全省生産額 省内支那人の稱する處に由れば、湖南米の生産額は一箇年六千萬石或は七千萬石と稱すれども、之を湖南省の人口と移出の米穀數量とに徴するに、民國元年末湖南民政使に於て選舉事務の爲めに調査したる處に依れば、湖南省の人口は二八、一三三、四九六人なり、然れども右は議員選出の關係上誇大の報告たるを免れず、今宣統三年民政部に於て發表したる二千五十八萬を眞に近

支那一府一石は
民國一府一石は
定に依るは
我米一升に
○米一升に
我米一升に
四國に於て
四國に於て
す百餘萬に
海關所定一
擔二七六貫
一比較すれ
ば支那の四
弱となる。

常德	同	一・八	一・六	一・五
岳州	同	四・〇	二・〇	三・〇
湘潭	同	五・〇	二・三	四・〇
漢口	一斗即一畝 の三分の二	二・〇	一・七	一・五
蘇州	一畝	三・〇	二・〇	一・〇

但各地に於て石の標準を異にす。

石の實量 支那に於ては穀類計量に石を用ゆれども此の場合は石と呼び、斤量を示すものにして、日本の石と其意を異にす、而も地方に由り米行に依り石の斤量に差あり、今湖南各地に行はるゝ一石の斤數を擧ぐれば次の如し。

長沙	百四十八斤	靖港	百四十七斤
易俗河	百五十五斤	常德	百四十四斤

第五 集散市場并に集散額

湖南省米の集散市場としては、易俗河、靖港、長沙、常德、岳州、衡州、永州、益陽、株洲等とす、就中靖港及易俗河は湖南米の大市場大集散地として名高し、靖港は長沙下

く、特に湘江流域に於ける米産地にては、一畝に付二石乃至二石半の收穫に止まり、瀏陽醴陵地方最も不作に終れり。

尙三年度は六月下旬まで發育宜しく、先づ豐作と豫想せられ居りしも、七月上旬に於ける湘江の汎濫及中旬二度の大汎濫の爲めに、少なからざる害を蒙りたる處あり、或は殆ど皆無に近き處もあり、醴陵附近に於て最も其の甚だしきを見たり、故に晚稻は七分作ならんと想像せられ、實に早稻は三分の一の有様なりき然れども常德附近は大なる水害を蒙ることなかりし爲めに豐作なりき。

第七 湖南米騰貴に關する調査（大正三年十一月）

湖南商務總會は米價騰貴を防ぐ爲め、大正二年初めに於て當局に向ひて之が外省移出禁止を請願し、大正三年末都督は右禁止の布告を發したるが、當時の米價は實際移出禁止を必要とする迄昂騰せるに非ずとし、内外人の中には非難抗議するものありしも、終に解禁に至らざりしなり。

然るに米價騰貴は移出禁止令發布後に到り却て反對の現象を示し、禁止前には上米一石に付五串四百文内外なりしが、禁止後は逐日昇騰して、六、七月に於て

流左岸に位し、集合する米の産地は寧郷、益陽、岳州、湘陰、雲田、下泥港、白沙洲、林子口、礪口等にして、易俗河に集散する米の産地は易家灣、石塘五、衡山、花石、株洲、陸口、湘鄉、九都等とす、而して、靖港は百萬石、易俗河二百萬石の集散ありと云ふ。

第六 市場出廻期及米の作柄

湖南地方に於ては第一期米は六月初めに刈取り、第二期米は七月に刈取り、其量最も多く、晚稻は八、九月に到りて刈取るものにして、最も遅きものは十月に到りて刈取るものあり、市場出廻時期は其收穫時期と大差なし、大正元年に於て當地方の米作は初期米は播種期に天候思はしからざりしも、左したる影響を及ぼさざりしが、發育時期に到り降雨多く、爲めに一般に虫を生じ、其他洞庭湖沿岸地方に水害あり、且取入期の天候亦充分ならざりしを以て、作柄其の前年に比し良好ならず。

大正二年に於ては早稻は近年稀なる豐饒にして、例年毎畝歩に付平均粃四石の收穫に過ぎざりしも、四石乃至五石の收穫あり、之に反し晚稻十月頃成熟は秋に入り、降雨少く早魃續きたる爲め、一般作柄不良にして例年の七分作と見る可